



がん患者会ははじめました!!

2月から毎月第4火曜日に当院講堂にてがん患者会『絆』を開催しています。

第1回目の発足式では、近藤繁子看護本部長より“1人で苦しまなくていいんです。1人で戦わないで”と患者さまにエールが送られました。始まったばかりで患者会としてもまだまだ未熟ですが、患者さまと共に、強い『絆』のもと大きく成長していきたいと思っています。がん患者さまはもちろん、ご家族や医療従事者など沢山の参加をお待ちしておりますので、お気軽にお立ち寄りください。

講習会・イベントのご案内

第10回濃尾医療連携セミナー 医療関係者向け

日時 平成23年4月16日(土) 16:00~18:00
 場所 グランヴェール岐山
 一般演題 日常経験する皮膚科疾患 2011
 講師 松波総合病院 皮膚科部長 永井 美貴 先生
 特別演題 医療連携から地域連携へ
 講師 社団法人是真会 長崎リハビリテーション病院 理事長 栗原 正紀 先生

ドールコーヒーショップOPEN!!

2月25日に松波総合病院内に新しくオープンしました。患者さんや近隣の地域のみなさまも、どうぞご利用ください。



営業時間
 平日・土：7時30分～18時
 日・祝：8時～18時

かかりつけ医院のご紹介



羽島郡 笠松町の さとう整形外科

整形外科 リウマチ科 外科(外傷)
 リハビリテーション科

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00~12:00	○	○	○	○	○	△
午後 4:00~7:00	○	○	○	—	○	—

△:午前9:00~午後1:00 ○:診療日 —:休診

休日 日曜日・祝日
 〒501-6062 岐阜県羽島郡笠松町代田815
 ☎ 058-388-0100
 FAX 058-388-8623

院長：佐藤 真司

松波総合病院とともに、笠松町および近隣の地域のみなさまに、よりよい「整形外科」領域の診断をご提供したいと願い、院長はじめとして、スタッフ一同、日々がんばっております。



お気軽にお問い合わせください。

☎ 058-388-0111
<http://www.matsunami-hsp.or.jp/>



当院は、病院内・敷地内全面禁煙です。皆様方のご理解とご協力をお願いします。

社会医療法人 蘇西厚生会 松波総合病院 〒501-6062 岐阜県羽島郡笠松町代田185-1

患者さまと
 病院をつなぐ
 かけはし
 No.138
 MATSUNAMI

まつなみ

2011
 4
 発行
 社会医療法人
 蘇西厚生会

松波総合病院が、被災地で医療支援。 つなごう希望。つなごう命。

3月11日に発生した東日本大震災で被害をこうむられた皆さまに、心からお見舞いを申し上げます。

松波総合病院では「一刻も早く医療を被災地に届けたい」「被災された皆さまの力になりたい」との思いから、日本医師会が派遣する災害医療チーム「JMAT(ジェイマツト)」の一員として被災地福島へ赴き、住民の皆さんの診療にあたってきました。一行は3月24日に当院を出発し、被災地・福島の福島県西白河郡、福島県東白川郡の2カ所を拠点に活動し、3月28日に帰還。帰院したばかりのメンバーが現地での活動の様子を語ってくれました。



3月24日 AM8:10 出発式



医薬品の他、寝袋やガスコンロ、カップ麺など可能な限りの物資を詰め込み、600キロ先の福島に。

組織あげての応援で、福島に2チームを派遣。

今回の大震災で医師会から医療支援の要請があったのが、3月17日。早速、当院でこの医療支援の話をしたら多くの職員が手を挙げ、あっという間に2チームが決まりました。Aチームは、医師(村井敏博)、看護師(祖父江純子・粥川良子)、事務(山田源久・大田雅也)の計5名で、西白河郡の西郷村で避難する方々(約500名)の診療に。また、Bチームは医師(川口雅裕)、看護師(杉原智子・森嘉緒史)、事務(村山弘三・水谷育雄)の計5名で、東白川郡の2つの村の避難所におられる方々(約200名)の診療にあたりました。積極的に準備を手伝ってくれたり、不在の間のスタッフのやりくりをしてくれるなど、留守を守る職員たちもチームを強力にバックアップ。現地に行けなくても支援の気持ちを全面に出し、応援してくれた職員全員に感謝です。



被災者からたくさんの「ありがとう」という言葉をもらい、逆に私たちが励まされました。

のもとに往診して声かけをしたり、その後の様子を確認するなど、手厚い診療ができました。内容としては、高血圧、口内炎、風邪、下痢などが多かったこと。さらに慢性疾患を持つ方で、今度薬がいつ手に入るか不安を抱えている方が多いこと。妊婦さんや乳幼児も多く、原発による水や食料への影響を不安視されている方も多く見られました。ホッとしたのは、インフルエンザの兆候が見られた方を早めに対処したことで、大事に至らなかったこと。空気も衛生状態も悪い避難所では、感染症が一番怖いからです。正味3日という短い間でしたが、濃密な支援ができたと思います。



マイナス4℃の雪煙舞う現地(診察室の窓から撮影)。この間、絶え間なく余震が続き、強い地震経験がない私たちが脅かされました。

ひとりでも多くの命を守るために、 これからも全力で支援します。

支援活動の中で感動したのは、被災者の方々が多大な被害にあわれたにも関わらず、明るく、前向きに過ごしておられること。また、「検査に頼らず、患者自身を診ることの大切さを教えられた(医師)」「お母さんと赤ちゃんに笑顔でいてほしいと強く思った(助産師)」「患者さんの気持に寄り添う看護を大事にしていきたい(看護師)」「支援活動を通して病院全体の士気が高まった(事務職)」など、それぞれが、これからも自分ができることに全力に取り組み、医療に貢献していく気持ちを新たにすることができました。今頃、被災者の皆さまの疲れや不安はピークに達していることと、思います。どうかお元気で…。



避難所の中を、赤い制服の世田谷看護師チームと青い制服の当院災害派遣チームが駆け回りました。

手術支援ロボット 「ダ・ヴィンチ」講演会を 開催しました。

3月10日、松波総合病院では、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の日本における第一人者、宇山一朗先生、橘政昭先生をお招きして、「ダ・ヴィンチ講演会」を開催しました。この講演会は、昨年12月、当院が最新鋭のダ・ヴィンチを導入したことを記念して企画されたもので、この日は県内外の医療関係者ら約200名の方々が参加。最先端ロボット手術への関心の高さが伺われました。

日本にまだ14台しか導入されていない、最先端の手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」。1~2cmの小さな穴より内視鏡カメラとロボットアームを挿入し、手術者は3Dモニター画面を見ながらロボットアームを操作して手術を行います。



岐阜市内のホテルで行われた「ダ・ヴィンチ講演会」。

「手術室からこんにちは」 チームワークと笑顔で、 安心・安全の手術をお届けします。



手術中、外回りの看護師は患者さんの様子を見守ると同時に、器械出し看護師や外科医・麻酔科医の要求に応えます。



手術室 看護師
五十川 将弘主任

5室の手術室は毎日フル稼働。 多種多彩な手術を行っています。

当院の手術室は全部で5室。うち1室はクラス1000と呼ばれる非常にクリーン度の高い手術室になっています。スタッフは、麻酔科医4名、看護師18名の計22名で、年間約2700件、1日あたり12~13件の手術に対応しています。また、いつでも緊急手術に対応できるよう、24時間365日、万全の体制を整えています。手術室では、外科、整形外科、眼科、形成外科、泌尿器科、産婦人科など各診療科のさまざまな手術が行われていますが、特に最近では、大腸がん、胃がん、食道がんなどの腹腔鏡手術が増えています。さらに昨年12月には最先端の医療用ロボット「ダ・ヴィンチ」が新たに仲間入り。現在は、医師2名、臨床工学技士1名、看護師2名が「ダ・ヴィンチチーム」を組んでトレーニングを積んでいます。

患者さんの安心・安全を最優先に、 快適な手術環境を整えています。

平日は午前8時ごろから一日の準備を開始し、9時に各手術がスタートします。手術はおおむね夕方には終了しますが、ときには10時間を越す手術もあり、長い一日になることもあります。そんな毎日の中で私たちが最も大切にしていることは、医師、看護師が一丸となり、手術を受けられる患者さまの安心・安全な手術のために全力を尽くすこと。たとえば手術を受けられる患者さんは不安と緊張感でいっぱいだと思いますので、手術前と手術後はできるだけ患者さんの病室を訪問し、不安や緊張感を少しでも和らげることができるようサポートしています。

また、感染対策はもちろん、手術ごとに使用される器具や針、ガーゼは、手術の前と後でその数が合うまでカウントし、患者さんの体内への置き忘れ防止に努めるなど、手術患者さんに安全で質の高い手術を提供できるよう努めています。



手術中も患者さんの安全・安楽が保たれるよう、麻酔科による厳重な麻酔管理や、看護師による看護が行われています。

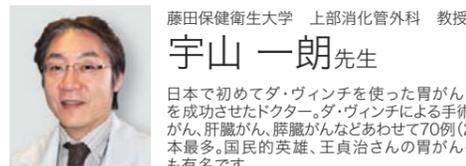
手術室のスタッフはみんな前向き。 チームワークも抜群です。

私たち手術室スタッフには、チームワークと集中力、そして先を読み状況を判断する力が求められます。人の命を預かる仕事で緊張感も強いられませんが、それだけにやりがいも十分。医師、スタッフが協力しあって万全の準備をし、目的の手術が問題なくスムーズに終わったときは何よりも嬉しく、明日への力になります。病棟スタッフとは違い、手術室スタッフは患者さんとお話する機会は少ないのですが、私たちは、患者さんが安心して手術を受けられ、笑顔で帰られていくことをめざして日々研鑽を積み、自信と誇りをもって仕事に取り組んでいます。手術室はピリピリしているというイメージがあるかもしれませんが、元気で明るいスタッフが笑顔でお迎えますので、安心して手術を受けてください。



器械出し看護師は、手術を熟知し常に先を読みながら器械を渡します。

講演1 『消化器外科領域におけるロボット手術の経験』



藤田保健衛生大学 上部消化管外科 教授

宇山 一朗先生

日本で初めてダ・ヴィンチを使った胃がん手術、食道がん手術を成功させたドクター。ダ・ヴィンチによる手術実績は、胃がん、食道がん、肝臓がん、膵臓がんなどあわせて70例(2011年2月現在)と日本最多。国民的英雄、王貞治さんの胃がん手術の執刀医としても有名です。

ロボット手術の利点は、「①術野がリアルな3D画像で表示されること ②手振れ防止機能がついているのでより細かい操作が行えること ③人間の手首並みの自由度を備えており、指先の動きを直感的に伝えることができること」と語る宇山先生。胃がん手術、食道がん手術など、先生がこれまで手がけてきた

ロボット手術の実際を、映像を見ながら解説してくださいました。「切開手術であれ、腹腔鏡手術であれ、ダ・ヴィンチであれ、どこを切除し、どこを残すかという手術そのもののコンセプトは同じ。ただ、術者がイメージした手術をより正しく、より安全に、よりクオリティ高くなるように支援してくれるのがダ・ヴィンチです」という言葉には、腹腔鏡下手術、さらにはロボット手術のパイオニアとして前人未踏の道を歩んでこられた経験の重みを感じました。

講演2 『我が国におけるロボット支援手術の現状と将来展望』



東京医科大学 泌尿器科学 主任教授

橘 政昭先生

東京医科大学泌尿器科学教室では2006年8月に日本で初めて前立腺がんに対するロボット支援手術を開始。以後、ダ・ヴィンチを駆使して日本で最も多くのロボット支援手術をこなしています。橘先生はその主任教授としてダ・ヴィンチの普及・指導に活躍しています。

ダ・ヴィンチによる手術は内視鏡下で行われる全ての外科手術に活用できることが実証されていますが、現時点ではその90%が前立腺がん。前立腺は骨盤の奥深くにあって手術野が狭く、複雑な術式が求められるのに対し、ダ・ヴィンチでは手術野を10倍の大きさの立体画像

で観察できる上に、遠隔操作で鉗子を自分の手のように動かせるので、細かい血管や神経を傷つけない安全な手術が可能になったからです。東京医科大学で行われた150例のロボット支援下前立腺全摘出術でも、がんのコントロールと予後は内視鏡手術、回復手術とほぼ変わらないものの、出血量と合併症がかなり少ないことが際立っています。高額のコストなど課題もありますが、導入が盛んな韓国の例を見ても、ロボット手術の症例数は引き続き増加するものと思われれます。